

昭和戦中期の戦時託児所について — 幼稚園から戦時託児所への転換事例 — ①

矢 治 夕 起

（2013年10月14日受理）

要 約

米国による本土空襲が必至となる中、1944（昭和19年）4月、東京都は都下の公私立幼稚園に対して休園・閉鎖、もしくは戦時託児所への転換を求める通牒を出す。多くの幼稚園が休園・閉鎖に向かう中、戦時託児所に転換して保育を続ける園も僅かながら存在した。その一つ、1941（昭和16）年に開園した江戸川双葉幼稚園は、1944年7月1日付で戦時託児所へと変わる。戦時託児所は、ほぼ年中無休で長時間保育をするよう規定されていたが、江戸川双葉戦時託児所では戦時託児所への転換後も、幼稚園時代とほぼ変わらない保育が続けられていた。東京都は幼稚園から戦時託児所に転換したすべての園に対して、戦時託児所としての基準の遵守を強く求めていたのではなかった実態が明らかになった。

キーワード 江戸川双葉幼稚園、菅原衛行、戦時託児所、東京市（東京都）、
「幼稚園閉鎖令」

1 はじめに

2012（平成24）年8月、子ども・子育て関連3法が公布され、現在 内閣府を中心として、幼保の一元化・一体化が本格的に進められようとしている。しかし、幼保の統合の問題は今日的なものではなく、戦前既にその統合が課題となっていた。先行研究においても、1926（大正15）年の「幼稚園令」制定の頃から1938（昭和13）年の教育審議会答申「国民学校、師範学校、幼稚園ニ関スル件」が出される前後までの間、幼保の統合を巡って幼稚園側、託児所^{注1)}側のそれぞれに様々な動きがあったことが指摘されている^{注2)}。結局、教育審議会における議論でも幼稚園・託児所（保育）の一体化の問題は、「今後政府に於て十分慎重なる研究を遂げ、幼児保育上有効適切なる措置を講ぜられたい」と先送りになされた¹⁾。しかし、太平洋戦争が開戦し、戦局が悪化するのに伴い、実態としては「幼稚園と託児所の差はほとんどなくなり、両者を一丸として国策に協力しよう²⁾」という状態が出現していた。

成人男子出征による「銃後」の労働力不足を補うための女子勤労動員は1939（昭和14）

年の国民徴用令の施行に始まる。当初は未婚女子への就職奨励という程度であったが、労働力不足の深刻化に伴い、1943（昭和18）年以降、未婚・既婚を問わず女子の大量動員がかけられる³⁾。明治末期から昭和初期にかけて開設された託児所は、主に都市部の貧困層のための救貧対策として設けられていたが、戦時体制下の女子の大量動員はそれまでの貧困家庭のみならず、一般家庭の子どもの託児の必要をも生じさせることになり、名古屋市、福岡県、大阪市、東京市など全国各地に戦時託児所など臨時の簡易保育施設が数多く設置された⁴⁾。さらに1943年以降、福岡県を皮切りに、東京都、愛知県、名古屋市などで、幼稚園を保育施設へ転換する動きが出てくる⁵⁾。全国的には、かなりの数の幼稚園が戦時託児所へ転換したが⁶⁾、東京都に関しては、「戦時託児所として保育を続ける意思表示をした園長は少なく、多くの幼稚園は閉鎖に傾いた」⁷⁾とされている。しかし、都内でも十文字高等女学校附属十文字幼稚園が「十文字高女附設戦時託児所」へ転換した例が報告されており⁸⁾、都内でも少数ではあるが幼稚園から戦時託児所へ転換して保育を継続した幼稚園が存在している。本稿では、1941（昭和16）年に江戸川区内初のキリスト教主義幼稚園として開設された後、1944年に戦時託児所に転換して保育を続け、戦後、再び幼稚園としての認可を受け、現在も開設の地で保育を行っている東京都江戸川区の江戸川双葉幼稚園の資料^{注3)}に基づき、同園の戦時託児所への転換の経緯、戦時託児所としての保育内容などを検討し、これまで取り上げられることが少なかった、幼稚園から戦時託児所へ転換した幼稚園の実態を明らかにする一助としたい。

2 東京における戦時託児所の設置と「幼稚園閉鎖令」、幼稚園の動向

東京では1941（昭和16）年4月、「東京市保育所使用条例」を定めていたが、それを廃止して1943（昭和18）年4月、「東京市戦時託児所使用条例」を告示した。これにより、託児所は貧困家庭の子どものみにとどまらず、出征兵士遺家族の子どもや徴用等で母親が働かざるを得なくなった家庭の子どもにまで、対象が広げられるようになった。対象家庭の拡大ばかりでなく、保育料、対象児童の年齢、保育時間等にも変化をもたらした。保育料は、「東京市保育所使用条例」では1日5銭、月額2円以下だったのが、「東京市戦時託児所使用条例」（「東京市戦時託児所使用条例施行細則」）では乳児（1歳6ヵ月未満児）月額6円、幼児月額4円50銭と大幅に引き上げられた。対象児童の年齢は、前者では「生後6月以上ノ乳児」であったものが、後者では「生後3月以上ノ乳児」と月齢が引き下げられ、保育時間も30分から60分延長になった⁹⁾。

また、幼稚園側も、東京都教育局の意向を受けて、1943年4月、東京都私立幼稚園協会が「決戦即応保育体制ノ件」を定め、傘下の私立幼稚園に通知している。挙国決戦体制の状況下、一般家庭においても母親が増産や町内勤労に当たっていることに鑑み、保育時間を3時まで延ばし、共働きの場合は5時まで保育する、土曜日でも1日保育、地域の必要に応じて日曜日でも保育することなどを求めたものであった。幼稚園に託児所の機能を持たせるようにもみられるが、「決戦即応保育体制ノ件」には「時間延長其他」について「単ナル時局便

乗ヤ託児所化ヲ意味スルモノニアラズ 充分ナル幼児教育ヲ目標トシタル内容ヲモツコト」との注意書が付されており、「幼稚園関係者は幼稚園と託児所は一線を画するものとして位置づけようとする気運が強いものであった」¹⁰⁾ ことがうかがわれる。

1944（昭和19）年に入りアメリカ軍機による空襲が激しくなると、幼児を集団で置くことの危険を避けるため、東京都は「幼稚園閉鎖令」と通称される通牒を出す。東京都教育局は4月19日、泰明国民学校の講堂に都下の公私立幼稚園園長を集め、通牒「公私立幼稚園非常措置ニ関スル件」を示し、保育事業を中止するか、保育を継続する場合は戦時託児所へ転換するよう促した¹¹⁾。当初、この通牒の対象は認可園のみで、無認可園は対象外となり保育を継続できると解され、休止に追い込まれた認可園側から多数の苦情が出たものと思われる¹²⁾。同年5月24日、東京都民生局長・教育局長名で各区長宛に「公私立幼稚園非常措置に対スル善後処置並ニ保育施設ノ整備ニ関スル件依命通牒」が出され、400を超える無認可幼稚園その他各種保育施設に対しても保育事業休止が求められることとなった。そして、同日、都は「戦時託児所設置基準」を定めた¹³⁾。

これらの一連の措置により、東京都では公立（都立）幼稚園51園は率先して休園し¹⁴⁾、先述したように、私立幼稚園の多くも戦時託児所へは転換せずに休園、閉鎖へと向かった。

3 江戸川双葉幼稚園について

「はじめに」で記したように、江戸川双葉幼稚園は1941（昭和16）年11月29日、キリスト教の牧師である菅原衛行によって江戸川区北小岩に開設された。初代園長の衛行が、1948（昭和23）年6月に東京都から教職不適格者と指定されたため、同年7月、衛行の妻菅原ツマが2代目園長に就いた¹⁵⁾。3代目園長は衛行の長兄祐衛（すけもり）の子で衛行の養子となった菅原祐治氏、4代目園長は祐治氏の妻菅原久子氏、そして2013（平成25）年度から菅原祐治・久子氏の子息で衛行の大甥（又甥）に当たる菅原創氏が5代目園長を務めている。

菅原衛行は、1906（明治39）年、現・宮城県本吉郡南三陸町歌津上沢の農家の三男として生まれた^{注4)}。1925（大正14）年に軍に入隊し、1928（昭和3）年、東京で憲兵としての勤務を始めて間もなく肋膜炎を発症し、肋膜炎の悪化により予備役となり宮城県に帰省する。帰省後も脊椎カリエス、肺結核、腸結核と次々と病に襲われるが、療養中の1931（昭和6）年6月、キリスト教に入信し、独学でキリスト教についての研究を深めていった。1934（昭和9）年9月、結核治療のため再び上京し、救世杉並軍療養所に入院し、1938（昭和13）年10月までのおよそ4年間、療養所で療養生活を送った。

1938年には療養所を退所する目途は立ったものの、長期間にわたる療養生活で就職活動はままならなかった。10月、事務員募集の広告に応募して向かった高輪台の松住院の事務長が、衛行の徴兵検査時の徴兵官だったという奇遇に恵まれ、松住院で健康保険担当職員として就職することができた。

元来子どもが好きで、幼児にキリスト教精神に基づいた教育の場を作りたいと願っていた

衛行は、救世軍療養所に入所中、療養所の近くにあった和田幼稚園に赴き、幼稚園建設に関わる法令や建設に要する費用等の教示を受けた。また、日本における幼児教育の先駆者の一人といわれる高崎能樹の阿佐ヶ谷幼稚園にも訪れ、幼稚園を基盤とした教会の在り方などについて話を聞き、自分の幼稚園、教会を持ちたいという思いを強くしたと思われる¹⁶⁾。

市川から通勤していた松住病院の同僚のアドバイスを受けて、1941（昭和16）年3月中旬に小岩に幼稚園を作ることを決め、同年4月、中野から小岩に転居する。衛行は病院勤務の傍ら、7月には幼稚園用地の賃貸契約を終え、8月に園舎の建設に着工した。それらとほぼ同時進行で、自らの幼稚園の保育者となってくれる人材（伴侶）探しも進めていた。救世軍関係者の紹介で永島ツマ^{注5)}と会い、幼稚園建設に興味と希望を寄せるツマとの結婚を決め、8月16日、キリスト教式の結婚式を挙げる。

幼稚園の名称は「幼児と信仰にふさわしいもの」「呼び易い」という理由で「双葉幼稚園」と決まった¹⁷⁾。病院勤務の余暇に園児募集のチラシを印刷・配布したり、ポスターを作成するなどした努力が実り、開園時までに園児は5～7名位集まればよいと思っていたところが、22名もの申し込みがあり、夫婦二人で大喜びをしたという。

建築費が増大したことによる資金の枯渇、瓦をめぐる詐欺被害など様々な壁にぶつかりながらも、11月29日開園式を迎え、12月1日から保育を開始することができた。

ツマが主任保姆、保姆学校からの実習生を助手として保育を始めたが、衛行はまだ松住病院の勤務を続けていたため、勤務先の許可を得て、開園後1週間ほどして初めて朝の会の保育に参加した。その時の様子を次のように綴っている。

オルガンの歌に合わせて『結んで開いて』を歌いつつ遊戯する様、5、6、^(ママ)7歳の幼児にして、僅か一週間足らずの訓練で、よくもこうまで揃って可愛いお手々を無邪気に敲き、お口いつぱい開いて上手に歌を歌えるものだ、と感心させられた。見馴れない私の顔を見て、一層おとなしく、お行儀よくやつて居る様子であつた。実に可愛い子供の世界であつた。ああ、報いられたと瞬間にして感ぜざるを得なかつた。家内は幼児に私を紹介する。私の最初のお話は、旧約書に出て来る獅子穴のダニエルであつた。…（中略）… 子供達は神妙な顔をして聞いて居る。私は安堵の胸を撫でつつ松住に駆けつけた。その後も土曜日毎、時間を貰つて、子供達にお話をする事にして居た¹⁸⁾。

双葉幼稚園の保育は軌道に乗り始めたが、衛行は病院勤務に加えて幼稚園建設や金策という過労状態が災いして、腸結核を再発して体調を崩し、その年の年末、松住病院を退職して幼稚園の運営に専念することになる。1942（昭和17）年に入り、冬休み明けからは衛行も午後1時の降園まで保育に携わるようになった。そして、同年3月25日、第1回卒園式を迎え、8名の園児を送り出した。昭和17年度は40名ほどの幼児で新学期が始まった。

双葉幼稚園は当初、無認可園として開設されたのであるが、「幼児教育を使命として、将来長くこの事業をなす為に」¹⁹⁾ 幼稚園令による認可を受けるべく、同年1月頃から認可申請の準備を始め、2月27日に「江戸川双葉幼稚園」として認可申請書を江戸川区に提出する。

同年8月5日付で小岩地域にあった8園の中で唯一、認可が認められたものの、「園居建築ニ関シテハ図面通り施行シ竣効ノ際ハ届出本府ノ検査ヲ受クル様被致度」²⁰⁾ という園舎の補強増築工事を求める条件付き認可であった。補強増築には800円ほど要することになったが、手持ちの資金が不足していたため、「双葉幼稚園母の会」に資金の援助を募ったところ、47名ほどの母親たちから338円の寄付が集まり、不足分は園長負担として、同年8月9日には工事を終えることができた。

園の認可に次いで東京府の学務課から園長の認可申請を求められ、8月20日付で申請、9月1日付で認可される²¹⁾。

1943（昭和18）年3月23日に第2回卒園式を行い、卒園児は38名、昭和18年度には園児数が65名まで増加し、同年9月には園児数が80名を超えるまでになる。

1944（昭和19）年3月20日の第3回卒園式では卒園児は48名、昭和19年度は入園希望者が100名を超えたため知能検査を行い、80名で新年度の保育を開始する。その後も入園希望者が断たず、在籍児90名ほど、出席幼児数は常時82～83名という状態になったため^{注6)}、園舎内にあった園長夫婦の居室も保育室に改装し、衛行夫婦は園の近くの一軒家に転居することになった。江戸川双葉幼稚園は開園以降、地域住民の信頼を得て、順調に発展していた。

4 江戸川双葉幼稚園の戦時託児所への転換

1944（昭和19）年4月19日、東京都によって「幼稚園閉鎖令」が発令された時の件は、『白銀の坩堝』に以下のように記載されている。

4月23日^{注7)} 東京都より幼稚園経営者に泰明国民学校に集合を命ぜられてあつたが、経営に関して御協議申し上げたくとの要旨をみると、時局に応じた保育方を懇請する程度に解して行つて見た。都教育局長生悦住求馬氏初め、課長連居並び、空襲の危険切迫を予想される今日、生命と教育を換え難しとの理由にて、当分の間幼児教育は中止せよ。幼稚園戦時措置として保育休止の命令が出た。休止期間も相当長期に亙ると考えられる故、保姆及び園長は国民学校教師としてやつてほしい。園の施設は空襲時の避難場所として、都防衛局に貸してほしいと言う。事の意外に、全経営者騒然たるものあり、質問戦に入り、現在の命令は認可幼稚園だけと解されるが、無認可幼稚園及び託児所は如何にと突込まれて回答に苦しむ様子。無認可幼稚園はない事になつて居るが、若しありとせば同様処置する。託児所は戦力の増強に役立つ故残置させる。現在の幼稚園に於ても、調査の結果、戦時下必要の施設と認定の場合、部長官に於て、戦時託児所として存置させる、と言う。

役人の退出後、園長たち大分居残つて、措置を今協議した。日時を改めて会合を約してその日は解散。順風に帆を上げつつありし幼稚園も、戦局の推移と共に、一大試煉に遭遇したのが感ぜられた²²⁾。

「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 保育日誌 江戸川双葉幼稚園」の4月19日の欄に

も、無認可幼稚園は放置したままで、託児所は保育を継続し、幼稚園だけ休止という処置に強い憤りを示す内容が記されている。

所属している「基督教保育連盟」「私立幼稚園協会」でも善後策に関して会合が重ねられたが、多くの園は一時的に保育を休止する道を選択せざるを得なかった。

北小岩付近は中流階級の住宅地であり、託児所を必要とする勤労家庭は少ないため、託児所に転換すると経営上困難になることは明らかだが、雑踏地ではないため空襲の危険度は低いので、戦時託児所に転換しても保育を続けていける可能性があると判断した衛行は、5月30日、幼稚園の休止と同時に、戦時託児所設置の認可申請を江戸川区役所に提出する²³⁾。

その後、江戸川区では6月9日に区内の全幼稚園園長を呼び出し、ほとんどの園長が出席する中、再度4月19日の「幼稚園閉鎖令」に関して事情説明が行われた。その結果、ほとんどの園が休園を申し出て、託児所への転換を希望した園は4園のみであったという²⁴⁾。

6月13日には区役所から戦時託児所設置に関わる実施調査が入り、「大体許可してもよいと思ふ由、良心に従つてよくやつて呉れる様」と設置の内諾を得るが、「戦時託児所設置基準」に従い、年中無休、朝6時からの長時間保育、医師や保健婦、炊事婦などを常駐させるようにとの指示に、衛行は「それは理想であり、机上の空論に過ぎん」と不満をのぞかせている²⁵⁾。

7月1日付で江戸川双葉戦時託児所は東京都から設置の認可を受けることとなった²⁶⁾。その時の心境を衛行は以下のように述べ、保育環境が厳しくなる中、幼児教育に邁進する決意を新たにしている。

時局の嵐となつて、保育界にも神の審きが^(ママ)のぞみ来たつたのである。震わるべきものは震い落とさんとする神の御業なのだ。斯る^(ママ)試煉に遭遇してこそ、幼児教育者としての使命の存否を問われて居るのだ。自らがなす保育事業に生命が流れて居るや否やが、自らの回答を待つて居るのだ²⁷⁾。

5 戦時託児所としての保育活動

「幼稚園閉鎖令」が出された翌日4月20日の保育日誌で衛行は、「新聞ラヂオで幼稚園の休園を伝え、子供等が登園するや否や気遣つて行つて見ると通常と何等変わりなし、母達も聞きに来る者一人もなかつた」と、閉鎖令の影響がなかったことに胸をなでおろしている。その後、戦時託児所としての設置認可の通知を受けた8月16日以降も、保育日誌を読む限り、それまでの幼稚園時代の保育と何等変わらない保育が続けられている。

一方で、防災対策として防空壕を掘り始め（4月27日、木材等での補強工事を行い、完成したのは8月5日）、5月22日以降は夜間に空襲警報が発令されて解除されないため、休園という日が徐々に増えていく。更に、同年7月4日には初めて、子どもたちが登園した後に空襲警報が発令され、即刻「下校」させるなど戦況の悪化が様々な形で保育に影響を及ぼし始める²⁸⁾。

江戸川双葉幼稚園から戦時託児所に代わり、保育日数にはどのような変化がみられたのであろうか。「東京市戦時託児所使用条例施行細則」では、戦時託児所の休日は1月1日のみと規定されているが²⁹⁾、江戸川双葉戦時託児所では、1944（昭和19）年度に関しては7月26日～8月6日、12月24日～1月5日、3月20日～4月8日の期間休園している³⁰⁾。夏休みは通常の幼稚園より休園期間が短い、冬休み、春休みは幼稚園時代と変わっていない。1945（昭和20）年度の夏休みは、連日の空襲のためか、8月1日に夏休みに入った後、6日、13日、20日、27日の月曜日4日間のみ開園となっている³¹⁾。

保育時間も、「東京市戦時託児所使用条例施行細則」では4月1日～10月31日の期間は午前6時から午後7時30分、11月1日～3月31日の期間は午前6時30分から午後7時30分とされているが³²⁾、戦時託児所に変った以降も幼稚園時代と同じ保育時間で、登園は9時前後、降園は午後1時半前後が多いようである。しかし、1945（昭和20）年4月以降、卒園児で国民学校（当時の小学校の呼称）1、2年生の児童を受け入れて、学科等を衛行が教えるようになってからは^{注8)}、小学校児童を対象に午後遅くまで預かる日も出て来ている^{注9)}。とはいえ、1、2年生の指導も遅くとも午後4時位まで、「東京市戦時託児所使用条例施行細則」が求めている午後7時30分まで預かるようなことは全くなかった。

1944（昭和19）年度、45（昭和20）年度の江戸川双葉幼稚園・戦時託児所の在籍園児数の推移は以下の表1の通りである。（月の途中で退園した者、月の途中で入園した者も含む、1945（昭和20）年度は国民学校1、2年児童も含む。）「東京市戦時託児所使用条例」では生後3ヶ月以上の乳児から受託するよう定めているが、戦時託児所になった後も、3歳未満児は全く在籍していない。また、1944（昭和19）年5月24日に定められた「戦時託児所設置基準」は、戦時託児所への入所条件を「保育条件の欠如又は不足する家庭」と定めていたが³³⁾、1944（昭和19）年度、45（昭和20）年度の出席簿を見ても、その条件に従って在籍児を制限した様子はみられない。

表1 江戸川双葉幼稚園・戦時託児所 昭和19年度・20年度の在籍児数

年 度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1944（昭和19）	92	91	86	78	76	83	75	79	73	52	47	48
1945（昭和20）	31	38	32	29	27	39	40	56	45	48	48	52

1944（昭和19）年7月以降の在籍児の減少は、「保育に欠ける」という制限の適用ではなく、同年6月に始まるB-29による本土空襲、7月以降の政府・東京都による縁故疎開の強力な「勧奨」と第3学年以上の学童集団疎開の断行などにより、都心部から子どもの姿が消えるのと歩を合わせたものであると考えられる。

先述したように、1944（昭和19）年4月、5月には90名を超えるまで順調に発展していたものの、1年後の1945（昭和20）年2月、3月には50名を切り、園児数は半減する。同年2月19日、3月4日と江戸川双葉戦時託児所のある小岩地域も空襲を受けたことにより³⁴⁾、同年4月にはピーク時の三分の一にまで減少してしまう。

同年8月の夏休み中の保育日、6日、13日、20日、27日の出席児（小学生含む）は6名、6名、14名、15名で、8月15日に終戦を迎えて空襲がなくなったのに伴い、僅かずつではあるが、子どもたちが園に戻ってきている³⁵⁾。それぞれの日の保育内容も、終戦前の13日には習字で「カチヌケ日本」「大和だまし」という文言を清書させるなど、時局を反映した活動もしているが、その他は、午前中は幼児も含めて自由画、遊戯、習字、絵本読みなどを行い、午後は1、2年生に「算数」、「読方」、「言葉ノケイコ」などを教えるという様子は、終戦を挟んでも変わることなく続けられている³⁶⁾。

菅原衛行、ツマ夫妻は戦時下という困難な状況の中でも、子どもたちに対する深い愛情と宗教的な信念の下、子どもたちのために保育を継続しようとする姿勢を貫いたといえよう。

5 まとめと今後の課題

戦時下、幼稚園から戦時託児所に転換した園是全国的にはかなりの数に上るとみられるが、東京都においては「幼稚園閉鎖令」以降、中心部では休園する幼稚園が多かった。しかし、江戸川区のように当時田園地帯が広がり、大きな軍需施設もないような地域では、空襲を受ける可能性が相対的に低いと判断して、戦時託児所に転換して保育を続ける園も僅かながら存在していた。

今回は江戸川双葉幼稚園の開設、戦時託児所への転換の経緯、戦時託児所としての終戦までの保育の様子を追い、幼稚園から戦時託児所に転換した園の実態を明らかにした。「東京市戦時託児所使用条例」、「東京市戦時託児所使用条例施行細則」で受け入れ幼児の年齢、保育日数、保育時間など託児所としての規定を定められてはいたが、江戸川双葉戦時託児所では転換後も幼稚園時代とほぼ変わらぬ内容の保育活動を続けられていた。託児所へと変わった時点で江戸川区から実地調査が入ったが、その後、人員配置や設備など、戦時託児所としての規定を遵守しているかなどの調査が入った様子もない。先述した幼稚園から戦時託児所へ転換した事例の一つである十文字高女附設戦時託児所の場合、戦時託児所に転換したことによる変化の一つとして、文部省や東京都庁からの視察者が多くなったことが挙げられている³⁷⁾。これは、前身が学校附設の幼稚園で、在籍児が200名という大規模な園であったためだと考えられる。東京都は幼稚園に戦時託児所へ転換するよう指示はしたものの、その後の戦局の悪化などにより、「戦時託児所設置基準」の遵守など、転換した個々の園への指導・管理はほとんど行われていないに等しい状態だったのではないかと推測される。

今回は、江戸川双葉戦時託児所が終戦を迎えるまでを取り扱ったが、今後は、終戦後に江戸川双葉戦時託児所が幼稚園に戻る経緯、都内の他の幼稚園から戦時託児所へ転換した園の実態などを調べ、東京都における幼稚園から戦時託児所へ転換した園の全体像やそれらの園の戦時託児所としての位置づけを明らかにしたい。

注

- 1) 託児施設の名称は戦後、児童福祉法により「保育所」という呼称に統一された。戦前は、「託児所」「託児場」「保育所」「幼稚園」など様々な呼称が用いられていた。本稿では以下、戦前の最も一般的な呼称である「託児所」という呼称を使用する。
- 2) 例えば、一番ヶ瀬康子〔ほか〕『日本の保育』ドメス出版、1962、鷺谷善教『私たちの保育政策』（実践保育学講座4）文化書房、1967、日本保育学会『日本幼児保育史第4巻』フレーベル館、1971、同前『日本幼児保育史第5巻』フレーベル館、1974、穴戸健夫〔ほか〕『保育の歴史』青木書店、1981など。
- 3) 江戸川双葉幼稚園の資料は、以下の3つの資料からなる。①創設者菅原衛行（もりゆき）の自伝『白銀の埧塙』（江戸川聖書教会刊、1954（昭和29）年発行、応召して上京した1928（昭和3）年から1945（昭和20）年8月までの闘病生活の様子や幼稚園設立までの経緯が詳しく綴られている。）②創設時（1941（昭和16）年）から現在に至るまでの許認可関係の書類がほぼ年代順に収められているファイル（以下、「江戸川双葉幼稚園資料ファイル」と表記。）、③段ボール3箱に開設時から1949（昭和24）年度頃までの年度ごとの出席簿、衛行が綴った保育日誌（昭和19年度に関しては、昭和20年1月8日～3月31日の期間は衛行の体調不良のためか、妻のツマが書いている）、子どもたちの作品集などが順不同に収められたもの（以下、「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 保育日誌 江戸川双葉幼稚園」と個々の資料綴りに付された表紙に記されているタイトルを資料名とする。出席簿と保育日誌は昭和19年度以降のものが残っている。）江戸川区内の戦前の幼稚園、保育園の設立状況に関しては、江戸川区教育委員会編『江戸川区教育百年史』江戸川区教育委員会、1978、p.643-668に詳しい。
- 4) 『白銀の埧塙』には菅原衛行自身の生年月日について全く言及されていない。現園長の菅原創氏にも確認したが、生年月日は不明とのこと。『白銀の埧塙』に「大正14年の初夏、三男坊の希望の道として、将来軍人として御役に立つてやろうと考え、普通の検査より一年前に、当時十二条志願兵と言った現役志願をして」（p.101）という記述があることから、1925（大正14）年に19歳、したがって生年は1906（明治39）と推定した。以下、衛行の略歴、幼稚園開設までの経緯、開設から1945（昭和20）年までの内容は『白銀の埧塙』の記述に基づく。（衛行と妻ツマの生年月日、没年月日はその後、菅原創氏が戸籍を調べてくださり、衛行の生年月日は1906（明治39）年3月20日、没年月日は1972（昭和47）年10月15日と判明した。）
- 5) 永島ツマは救世軍の西新井小隊長永島惣吉の長女で、女学校卒業後、救世軍の士官学校に入り、東北地区で3～4年伝道活動に従事した後、伝道生活から離れて深川の育心会保育園に勤務していた。1941（昭和16）年4月からは保姆の資格を取るために、小石川の東京保姆伝習所に通学していた。伝習所では、午前中は幼稚園に実習生として派遣され、午後、学校で学科の授業を受けることになっており、幼稚園開設までは、午前中は小岩最大の「みどり保育園本園」で実習生として実習を行い、午後伝習所に通学していた。幼稚園開設後、伝習所を卒業するまでは自分の園で実習生として午前中のみ保育し、午後伝習所に通学していた。（1914（大正3）年3月10日生まれ。1972（昭和47）年5月28日死去。生年月日、没年月日は前注4）に記したように、菅原創氏からのご教示による。）
- 6) 「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 出席簿 江戸川双葉幼稚園」によると、1944（昭和19）年4月時点での在籍児童数は、ユリ男組28名、ユリ女組26名、バラ男女組11名、スマイレ男組11名、スマイレ女組16名、計92名となっている。

- 7) 正しくは、4月19日で衛行の記憶間違い。「江戸川双葉幼稚園資料ファイル」の中には当日会場で配布されたと思しき、昭和19年4月19日付の東京都次長松村光鷹名の通牒「公私立幼稚園非常措置に關スル件」が残されている。また、「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 保育日誌 江戸川双葉幼稚園」の4月19日の欄には、以下のような記述がある。

四月十九日 水曜日 雨

…(略)… 午後一時泰明国民学校に於て教育局長より通知をうけ園経営協議会に出席す。
戦時非常措置として、空襲の危険あるに我東京都下の幼稚園の保育を一時休止せしむと申渡さる。…(後略) …

- 8) 1944（昭和19）年8月以降本格化した学童集団疎開の対象となっていない小学校第1、2学年の児童で、縁故疎開をせずに都市部に残留する児童に対しては学校教育を行わないこと、国民学校校舎の教室などは軍用等に転用することが、1945（昭和20）年3月9日に閣議決定したため、都市部に残留の昭和20年度に新1、2年生になった子どもたちの多くが行き場を失うことになった。（逸見勝亮『学童集団疎開史—子どもたちの戦闘配置』大月書店、1998、p.108, p.199）
- 9) 1945（昭和20）年3月20日、昭和19年度卒園式の日の日誌に「学習会のことをお母さん達に相談した所大部分が賛成で実現出来るやもわからない。神や必ず私共の使命の道に歩ませていただけることを信じて前進するのみ。」との記述があり、それ以前に、1944（昭和19）年度の卒園児で疎開せずに東京に残る子どもの処遇に関して、衛行とツマとの間で学習会という形で受け入れるという話し合いがもたれていたものと推測される。（「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 保育日誌 江戸川双葉幼稚園」）残留児童の問題に関しては、学区の小岩国民学校から「六月一日より寺小屋学校を初むる予定なるも形式にして充分手が届き兼ねるから学習会を今迄通りやつて補つてほしいとの事」「ただ、八時三十分より十一時迄二時間で帰宅せしむ故に重複なき様時間の変更してやつてほしい」との要望があり、そのため、児童の学習指導に当たる時間が午後にずれ込むようになった。（「江戸川双葉幼稚園資料 昭和20年度 保育日誌 江戸川双葉戦時託児所」5月29日）

引用・参考文献

- 1) 穴戸健夫『日本の幼児保育 昭和保育思想史 上』青木書店、1988、p.131-134.
- 2) 文部省『学制百年史』ぎょうせい、1972、p.581.
- 3) 穴戸健夫〔ほか〕前掲書注2) p.88-90.
- 4) 穴戸健夫 前掲書1) p.267-270.
- 5) 同前p.271.
- 6) 日本保育学会 前掲書注2) p.67. 同書中の1970（昭和45）年に日本保育学会が行った「戦争中の幼稚園の状況調査」では、六大都市の幼稚園の32.3%が戦時託児所に転換したと回答している。（その他の都市、町、村を含める全体では12.6%）（同書、p.71.）
- 7) 東京都立教育研究所編『東京都教育史 通史編4』東京都立教育研究所、1997、p69.
- 8) 日本保育学会 前掲書注2)『日本幼児保育史第5巻』p.213-214、穴戸健夫 前掲書1) p.274-275.
- 9) 同前『日本幼児保育史第5巻』p.203-204.
- 10) 日本保育学会 前掲書注2) p.22-23.
- 11) 東京都立教育研究所編 前掲書7) p.68.

- 12) 菅原衛行 前掲書注3) p.190-191.
- 13) 東京都立教育研究所編 前掲書7) p.69.
- 14) 東京都立教育研究所編 前掲書7) p.68.
- 15) 「江戸川双葉幼稚園資料ファイル」中「教総発第330号 昭和23年6月30日 教職不適格通知について」及び「江教発第265号 昭和23年6月申請に係る双葉幼稚園の設立者変更の件認可する」
- 16) 菅原衛行 前掲書注3) p.131. 和田幼稚園に関しては詳細不明。阿佐ヶ谷幼稚園は1925（大正14）年に高崎能樹によって設立され、翌1926（大正15）年に認可幼稚園となった。1929（昭和4）年には幼稚園を基盤に阿佐ヶ谷東教会が作られ、幼稚園、教会とも現存する。ちなみに、阿佐ヶ谷幼稚園も1944（昭和19）年4月に阿佐ヶ谷戦時託児所に転換し、1945（昭和20）年9月に阿佐ヶ谷幼稚園に戻った。1965（昭和40）年、住居表示実施に伴い、園名がヶを除く阿佐谷幼稚園に変更となっている。（阿佐谷幼稚園のホームページより。）
- 17) 同前p.154. 開設当初は「双葉幼稚園」と呼称していたが、後述する認可園になる過程で、東京府学務課から同名の園があると指摘されたため、「江戸川」をつけて「江戸川双葉幼稚園」として認可を受けた。本稿では、認可前に関しては「双葉幼稚園」、認可後に関しては「江戸川双葉幼稚園」と表記する。
- 18) 同前p.157.
- 19) 同前p.168.
- 20) 「江戸川双葉幼稚園資料ファイル」中「午学第5961号 昭和17年8月5日 江戸川双葉幼稚園設立ノ件」
- 21) 「江戸川双葉幼稚園資料ファイル」中「午学第8087号 昭和17年9月1日 昭和17年8月20日 附申請菅原衛行ヲ園長ニ定ムルノ件認可ス」
- 22) 菅原衛行 前掲書注3) p.190.
- 23) 同前p.190. 同書では江戸川区役所への認可申請の日付を5月31日と記しているが、「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 保育日誌 江戸川双葉幼稚園」では5月30日に「朝食後区役所に行き、学事係大塚氏に面接、学事課長に面接職員の件、休園の届、託児所設置申請を提出」との記述があり、また「江戸川双葉幼稚園資料ファイル」中の1944（昭和19）年7月1日付、東京都長官大達茂雄名の戦時託児所としての設置認可通知（「昭和十九年五月三十日申請ニ係ル戦時託児所設置ノ件」通知）には「昭和十九年五月三十日申請ニ係ル戦時託児所設置ノ件受理候ニ付テハ」と記載されているので5月30日と判断した。
- 24) 「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 保育日誌 江戸川双葉幼稚園」6月9日。菅原衛行 前掲書注3) p.192.に「江戸川区に於て保育継続の希望のある認可幼稚園は私だけであった」との記述があるので、戦時託児所への転換を希望した4園はいずれも無認可幼稚園であったと思われる。
- 25) 「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 保育日誌 江戸川双葉幼稚園」6月13日、菅原衛行 前掲書注3) p.191-192. 東京都からの江戸川双葉戦時託児所設置認可の通知は8月16日に園に届いている。（昭和19年度 保育日誌8月16日）
- 26) 前出「江戸川双葉幼稚園資料ファイル」中の1944（昭和19）年7月1日付、「昭和十九年五月三十日申請ニ係ル戦時託児所設置ノ件」通知
- 27) 菅原衛行 前掲書注3) p.192.
- 28) 「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 保育日誌 江戸川双葉幼稚園」
- 29) 日本保育学会 前掲書注2) p.206-207.

- 30)「江戸川双葉幼稚園資料 昭和19年度 出席簿 江戸川双葉幼稚園」
- 31)「江戸川双葉幼稚園資料 昭和20年度 出席簿 江戸川双葉戦時託児所」
- 32) 日本保育学会 前掲書注2) p.206-207.
- 33) 穴戸健夫 前掲書1) p.275.
- 34) 木村秋夫『概説 江戸川区の歴史』木村秋夫, 2010, p212-214. 小岩地域は、3月10日の「東京大空襲」やその後の度重なる空襲では罹災を免れた。
- 35)「江戸川双葉幼稚園資料 昭和20年度 保育日誌 江戸川双葉戦時託児所」、「江戸川双葉幼稚園資料 昭和20年度 出席簿 江戸川双葉戦時託児所」
- 36)「江戸川双葉幼稚園資料 昭和20年度 保育日誌 江戸川双葉戦時託児所」
- 37) 日本保育学会 前掲書注2)『日本幼児保育史第5巻』p.213-214、穴戸健夫 前掲書1) p.274-275.